岩波講座　世界歴史　第 18 巻
――アフリカ諸地域　～20 世紀――

永原　陽子　責任編集

東京　岩波書店　2022 年　316 p.

本書は、原始・古代から現代までの世界の歴史を時代別・テーマ別に各巻に配置し、シリーズ全体で世界を俯瞰する『岩波講座　世界歴史』の第 3 期（全 24 巻）を構成する一巻である。第 1 期（全 31 巻；1969～1971 年）の刊行は東西冷戦の最中、日本の高度経済成長期にあたり、第 2 期（全 29 巻；1997～2000 年）の刊行は東西冷戦終結後の世界の再編成の時期であった。そして第 3 期は、世界情勢が極めて流動的ななか、2021 年以降に順次刊行されている。いずれも専門の研究者による書き下ろしの論考が並ぶが、特筆すべきは、第 3 期ではじめて「アフリカ」を冠して独立した一巻が編まれ、アフリカから見た世界の歴史を描く試みがなされたことだ。

第 3 期の各巻は共通して、「展望」、「問題群」、「焦点」の 3 部構成をとっている。アフリカ諸地域を扱う本書、第 18 巻の「展望」論文は、西欧中心的なアフリカ史観に対する挑戦の歩みであった研究史を概観する総論と、イギリスで歴史学を学び、独立後の母国でアフリカ史独自の方法と思想を追求したアフリカ人歴史家第一世代に焦点を当てた論考の 2 本である。次に、通史の中の特定のテーマを掘り下げた「問題群」の論文が並ぶ。ここでは、植民地支配以前に存在していた狩猟採集民の世界やトランスサハラ交易とアフリカの国家、インド洋沿岸のスワヒリ世界を扱ったのち、それを断絶した植民地支配、これを経て生まれた国家に関する論文が続く。また「焦点」論文として、歴史言語学、文字史料、アフリカとアメリカ、植民地経済、ジェンダーというテーマに基づいた通史を提示し、5 本の「コラム」が文書として残された口頭伝承、先住民運動、農業史、文化遺産の略奪と返還の歴史、日本との共通体験といった新たな切り口を提供している。

アフリカ各地の通時的な歴史が、地域横断的かつ共時的な歴史と絡まり合いながら世界史の一部を構成する。そうしたアフリカ史を時代と共に再考される研究者の認識枠組みと研究手法をもって刷新していく。紹介者も本書の所収の一章を執筆したが、全体構想・各章の関係性を検討した編集会議や編集段階での議論を通じて、歴史学は研究の対象として過去の事象を扱いながらも極めて現代的な学問であることを改めて感じた。新たに設けられたアフリカに関する第 18 巻はことさらその印象を強く残す。他にもアフリカ研究者が執筆陣として名を連ねる後続の第 22 巻『冷戦と脱植民地化 I　20 世紀後半』、第 24 巻『二一世紀の国際秩序』と合わせて手に取っていただきたい。

網中　昭世（あみなか・あきよ／アジア経済研究所）

© IDE-JETRO 2023